

稲葉千晴

明石工作
謀略の白露戦争

丸善ライブラリー

稲葉千晴

明石工作

謀略の白露戦争

丸善ライブラリー

明石工作

謀略の日露戦争

丸善ライブラリー 158

平成 7 年 5 月 25 日 発 行

著 者 稲 葉 千 晴

発 行 者 鈴 木 信 夫

出版事業部 深山恒雄

発 行 所 丸 善 株 式 会 社 東京・日本橋

出版事業部 〒113 東京都文京区本郷二丁目38番3号

編集部 電話(03)5684-5081/FAX(03)5684-2458

営業部 電話(03)5684-5571/FAX(03)5684-2456

郵便振替口座 東京7-5番

© Chiharu Inaba, 1995

組版印刷・中央印刷株式会社／製本・株式会社 星共社

ISBN 4-621-05158-X C0222

Printed in Japan

目次

序 神話の打破を目指して

..... I

「明石工作」の神話／『落花流水』の功罪／欧米での神話／資料のゆくえ／研究協力という手法

一 諜報工作の始動

..... 17

日露戦争の勃発／児玉源太郎の命令／明石元二郎の略歴／ロシアにおける諜報網の構築／ハンガリー人仲介人、バロク^{II}ド^{II}ガラ^{II}ンタ／明石、ストックホルムへ／対ロシア諜報網の完成／日本諜報網のゆくえ／諜報工作の規

模と目的

二 ポーランド抵抗運動と日本

..... 45

反ツアーリ抵抗運動の高揚／明石、ポーランド人と接触／ポーランド社会党
との交渉／シベリア鉄道破壊工作／日本でドモフスキとピウスツキ

三 反ツアーリ抵抗運動の扇動

..... 59

フィンランド抵抗運動とシリアクス／シリアクスの人物像／反ツアーリ統
一戦線の構築を目指して／参謀本部の対応／会議開催の根回し／抵抗諸党
の姿勢／ロシア社会民主労働党の不参加／参謀本部の資金援助

四 パリ会議の開催とその帰趨

..... 85

反ツアーリ抵抗諸党連合会議前夜の紛糾／パリ会議（第一回反ツアーリ抵抗
諸党連合会議）／パリ会議後の活動計画／参謀本部の失望／明石とシリアク

ス、断念せず

五 専制の動揺、革命の始まり——満州・ペテルブルク・西欧	99
------------------------------	----

旅順の陥落／「血の日曜日」事件／ロシア社会主義勢力の対応／明石の要望、
秋月の協力／外務省の逡巡／明石とシリアクス、エスエルに接触／ガボンの
公開状と各党の対応／ロンドン会談

六 武装蜂起計画への対応——外務省と参謀本部	115
------------------------	-----

旅順陥落後の満州／シベリア鉄道破壊工作の復活／消極的な参謀本部／最
終的な外務省の反対意見／参謀本部の決断

七 ジュネーヴ会議——第二回反ツァーリ抵抗諸党連合会議	127
-----------------------------	-----

第二インターとロシア革命運動／ジュネーヴ会議前夜／ジュネーヴ会議の
紛糾／極秘決議の採択

八 武装蜂起計画の始動 137

日本資金の使途／日本資金の流れ／明石のパリでの活動／シリアクスによる武器購入／ロンドンへの本拠地移転／スイスでの武器購入／ロンドンへの武器輸送／輸送船の購入／乗組員の募集

九 オフラーナの武装蜂起対策 155

一九〇六年の暴露本／フランスにおけるオフラーナの活動／日露戦争をめぐる国際関係／ロシア対外情報局と革命を売った男アゼーフ／フランス警察のねらい／明石らのオフラーナ対策／対日情報収集の成果と現実

一〇 ジョン・グラフトン号の航海 175

ロシア国内の混迷／ボリシェヴィキの武装蜂起計画とフィンランド／武器受け取りと蜂起準備不足の露呈／武器輸送船の出発／ポーツマス講和会議

と武装蜂起／フィンランド人による武器受け取り準備／第一回航海の失敗／日本の資金援助停止／ジョン・グラフトン号、第二の航海／武器輸送船の座礁

結び 「明石工作」は失敗か？

..... 205

日露戦争後のロシア革命運動／失敗の原因／「明石工作」の評価／「明石工作」の後世への影響

あとがき 217

文献 223

年表 227

序 神話の打破を目指して

「明石工作」の神話

「明石工作」は、古くは司馬遼太郎『坂の上の雲』から、最近では水木楊『動乱はわが掌中にあり』まで、多くの歴史小説において題材とされてきた。もちろん小説だけにとどまらない。歴史関連の書物で日露戦争を取り上げた場合、「明石工作」に触れられることも少なくなかった。

この「明石工作」とは、日本が日露戦争中ヨーロッパにおいて行った対ロシア諜報・扇動工作の総称である。明石とは、明石元二郎もとじろう陸軍歩兵大佐、当時は駐スウェーデン日本公使館付陸軍武官を務めていた。彼が中心となり、ヨーロッパにおいて危険を冒して貴重なロシア関連の情報を集め、また東京の陸軍参謀本部から莫大な資金をえてロシア革命勢力を扇動した、とい



ヨーロッパ駐在時の明石元二郎

うのである。そして多くの歴史小説では、この明石の活動が日露戦争の帰趨に多大な影響を及ぼした、と結論づけている。あまり女性にもてるタイプとはいえないものの、もう明石は日本の「007」なみの英雄として描かれているのである。

なぜ、これほど日本の歴史小説において「明石工作」がもてはやされるのであろうか。なぜ、決まって結論では明石の活動が高く評価されるのであろうか。

これは、日本人の欧米人に対するコンプレックスの裏返しと言えよう。明治初期から現在にいたるまで、日本は西洋文明を積極的に取り入れ、近代化を図ってきた。日本人は、ヨーロッパ人、特に白人に対して、先進文化

の担い手としてだけでなく容姿や行動パターンなどさまざまな点であこがれを持った。それと同時に、自らと比較して、一種言いようもないコンプレックスを抱いてきたのである。

日本人である明石が、ヨーロッパ人をスパイとして雇い、自分の手足のように使って情報を集めさせた。さらに、革命諸党というヨーロッパの反体制勢力を扇動して、ロシア政府の目をヨーロッパに向けさせ、極東での戦鬭を有利にしようとしたのである。日本がヨーロッパ列強の鼻をあかしたことになる。欧州の明石の活躍を思い描くことにより、つかのまではあるが、欧米人への劣等感が慰められるのであろう。

ところで明石は、本当にそれほどの快挙を成し遂げたのであろうか。たしかに明石の活動は、当時の金額で一〇〇万円（現在の約八〇億円に相当する）という莫大な資金を使ったと言われており、秘密工作としては規模も非常に大きいものであった。明石はスパイを雇い、ロシアについての情報を収集した。また、革命諸党に活動資金を提供し武器を与えた。一方ロシアでは、一九〇五年革命が起き、国内が混乱し、ロシア陸海軍は極東での戦鬭で敗れてしまった。一九〇五年九月のポーツマス講和条約では、ロシア政府は満州での利権を日本に引き渡し、南樺太を割譲せざるをえなかった。明石の諜報・扇動工作によって、ロシアは国内を混乱させられ、日露戦争に敗北したのである。ここに一つの神話ができた。

しかし、日本が勝利を収めたからといって、またロシアで革命が起きたからといって、単純に「明石工作」が成功したと言い切るのも問題であろう。歴史小説ならいざしらず、歴史学という学問のうえでは、そう簡単に断定するわけにはいかない。なぜならば、「明石工作」はヨーロッパを舞台として、日本人だけではなく欧米人との協力に基づいて行われたものである。日本側の視点からだけでは、明石の活動を十分に評価できないのは当然である。にもかかわらず、日本において一般にその活動内容が紹介され、高く評価されるにいたったのは、学問的に見ても信頼できる歴史資料が存在したからである。

『落花流水』の功罪

明石の活動を高く評価する際に、おもに利用される基本文献と、そこでの評価方法を挙げてみよう。

一九二八年に明石の伝記（小森徳治『明石元二郎』）が出版された。同書においては、参謀本部ではあまり期待していなかったものの、明石はロシア国内を混乱させ、ヨーロッパ・ロシアから極東へのロシア軍の派遣を遅らせた、と記されている。同じ文脈の中で、山県有朋が言ったとされる「明石といふ男は恐ろしい男だ」という一説を引用している。日露戦争当時、陸軍

の最高実力者であつた元老山県を恐怖させるほど、明石は謀略のセンスが抜群だ、と評価されているのである。

一九二五年に作成された陸軍大学の講義用テキスト（谷壽夫『機密日露戦史』^{としお}）では、明石が晩年に男爵を授かつた理由として、日露戦争中の実績がものを言つた、と述べられている。さらに「日露戦役戦勝の一原因もまた明石大佐ならざるか」とまで記されている。ここでは、もう「明石工作」が日本勝利の一因とまで言い切っているのである。

これらの書物が、大正末から昭和初めにかけて執筆された際に、「明石工作」について触れた部分は、多くが明石復命書『落花流水』に依拠している。この復命書は、日露戦争終結後、明石が帰国する船の中で参謀本部へ提出するために書いた報告書であり、客観的にみて第一級の資料であることは疑いない。原本は、陸軍部内で極秘扱いされ、参謀の教育用として長く参謀本部で利用されていたが、第二次大戦終了時に、他の多くの文書とともに焼却されてしまった。ところが、その下書きや写しは近年まで明石家で保管されていた（現在は国会図書館憲政資料室の「明石元二郎文書」に所蔵）。それ以外にも、憲政資料室の「寺内正毅文書」、および防衛庁防衛研究所戦史部図書館に、写本が存在する。第二次大戦勃発直前の一九三八年には、その写本の一つが対ソ謀略用内部資料として外務省調査局でタイプ印刷され、戦後になって出版社

(巖南堂書店) から売り出されもした。とにかく『落花流水』は、実際の秘密工作について本人自らが記した希有の書なのである。もしこの写しが残されていなければ、今日「明石工作」が注目されることもなかったにちがいない。

『落花流水』は、明石が日露戦争勃発直後から講和後にヨーロッパを離れるまでの間、克明に綴った自己の活動記録である。もちろん参謀本部に提出された公の報告書であるため、内容の信憑性は非常に高い。しかし、明石が自らの業績を過大に評価できるように手を加えたり、失敗した活動を意識的に省略した箇所がある。また、革命勢力の活動などは伝聞に基づいているため、誤記もすくなく存在する。それゆえ、他の資料と比較すると矛盾を生じてくることがある。

もつとも重要な資料でさえ、こういう状況であるから、『落花流水』を基にした伝記やテキストは、それ以上に史実とかけ離れて独り歩きすることになる。たとえば、伝記『明石元二郎』では、明石と当時ロシア革命の指導者として注目されていたレーニンとの会見場面を勝手な想像から作り出してしまふ、というぐあいである。それを孫引きして書かれた歴史小説などにおいては、何が書かれてあったとしても驚くにあたらない。しかし、安直に資料を利用してしまふという問題は、日本だけに止まらなかった。

欧米での神話

ロシア革命を成功させたボリシェヴィキは、革命を起こす際にどこから活動資金を手に入れたのであろうか。レーニンも含め、多くの革命指導者は、西欧諸国に亡命している間、自ら生計を立てねばならなかった。さらに、亡命先での機関紙の発行やそのロシアへの輸送、党の会合を開く際の会議費、武装蜂起のための準備費など、相当な額の活動資金が必要とされたわけである。レーニンらは、社会主義の理想を達成するために、資本主義世界からも多くの資金を調達しなければならなかった。もちろんドイツの社会民主党やイギリスの労働党などから資金援助を受けていた。しかし、革命を指導するために使われた莫大な費用の出所が、すべて明らかにされたわけではなかった。

ロシア一九〇五年革命期においても、ボリシェヴィキを含めたロシア革命諸党は活動資金の調達に非常に苦しんでいた。当時は民衆による広範な武装蜂起を画策していたため、武器や弾薬を購入しようとすれば、資金はいくらあっても十分ということはなかった。しかも資金の入手経路は判明していない。一方で、明石がロシア革命勢力に巨額の資金を援助した、という記録が日本に残っている。欧米でソ連を批判する立場から、一九六〇年代にロシア革命の資金の問題が研究対象として挙げられるようになると、革命資金と「明石工作」を結びつける研究が

生まれた。レーニンは、明石から活動資金を受け取っていたというのである。

ところで、日本語に不慣れな欧米のロシア史研究者にとって、『落花流水』なり明石の伝記なりを日本語で読むことは非常にむずかしい。それ以前の問題として、明石という日本人の活動にたどり着くまでが、容易なことではなかったはずである。欧米で「明石工作」が知られるようになるのは、北欧とロシア革命のかかわりからであった。

西欧で印刷された革命諸党の機関紙など非合法文書を、ロシア国内、特に首都ペテルブルクに輸送する場合、多くはスカンディナヴィア諸国経由で行われていた。日露戦争中、革命勢力は、同じルートを使って武器をペテルブルクに送り、首都で革命を起こそうとした。この「北欧地下ルート」にかかわったフィンランド人コンニ・シリアクスが、明石の協力者であったこと、また武器が日本の資金によつて購入されていたことから、「明石工作」に関心が寄せられた。くわえて伝記『明石元二郎』が、戦前フィンランドの日本公使館員の手によつて、抄訳ではあるが英語に訳されていたのも、欧米の研究者にとっては僥倖であった。レーニンと明石を結びつける素地は整ったのである。

日露戦争当時、レーニンは戦争でのロシアの敗北がロシア革命を前進させるという考え、すなわち敗戦主義をうたっていた。たとえこの敗戦が日本帝国主義を利することになろうとも、

ヨーロッパにおいてプロレタリアートが勝利すれば、彼の目的は達成されることになる。一方で明石には、日本の戦勝のために資金の続くかぎりあらゆる手段を講じる用意があった。ロシアの極東での戦争継続能力を低下できれば、革命勢力への援助さえ一切いとわない。こうした考えを持つ両者が、戦争中ヨーロッパのどこかで出会ったとしても不思議ではなからう。ここまで理解したうえで、両者の会見場面が含まれている『明石元二郎』という伝記の存在を知れば、研究者といえども飛びつきたくなる。こうして、めでたく明石がレーニンに資金を提供し、レーニンはその資金をもとにして革命を起こすことになった。

レーニンはロシア一九〇五年革命の混乱を拡大させることによって、日露戦争での日本の勝利に寄与した。もう一つの神話の誕生である。

資料のゆくえ

欧米における神話には、発表後すぐに二つの疑問が呈された。第一に、『明石元二郎』の記述を資料批判もせずに信じるのは問題だ、というのである。ただし、この議論も決め手を欠いていた。明石の足跡を明らかにする日本側の資料もなく、ソ連側の公開資料でもレーニンの面会記録を克明にたどることはできなかったからである。そこで、第二の議論から神話を突き崩そ